フイリピン滞在記 ⑯---フィリピンで誕生日を迎えて

ルソン大学日本語教師 為我井輝忠

フィリピンでの滞在もわずかになってきた。11月8日に帰国することになっているが、もうあとわずかだ。帰国が間近になってくると、これまで行っていないところで行ってみたいと思う場所がたくさんあるし、訪ねてみたい人もいる。しかし、この時期になると急にあわただしくなり、やらなければならない、たくさんの残されたことがありすぎて、どうしてよいか分からないくらいだ。

そんな折に私の10月14日の誕生日が近づいてきた。いつもはたいしたこともなく何となく過ぎて行ってしまうが、今年は全然想像できないような誕生日となった。私が教えているルソン大学の学生たちが私の誕生日を祝ってくれたのだ。

フィリピンでは誕生日を祝うことは、その人の大きな節目となるもので、大々的に祝うようである。宗教的な意味合いのクリスマス、復活祭、洗礼式、11月1日のAll Saints' Day(万聖節)と共に誕生日を祝うことは大きなイベントの一つで、宗教的な意味合いはないが、フィリピンの人々にとっては楽しみな日である。この国では誕生日の祝い方が日本とは異なる。日本だと家族を始めとして友人知人たちが祝ってくれるが、ここでは逆に誕生日を迎えた人が周囲の友人や知人たちを招くのである。

4年生の学生と共に

その意味で本来ならばフィリピン流に私が多くの人を招かなければならないのだが、外国からのゲストと言うことで多くの方からお祝いを受けた。今回4つの学生グループが誕生日のパーティを開いてくれた。みな私が教えているクラスの諸君で、それぞれ初級クラス2組(ⅠとⅡ)、上級クラスそしてその上級クラスの有志たちが拙宅でのパーティと近場のリゾート地でのパーティに招いてくれた。

先ずは、初級クラスⅡが、誕生日の当日14日は午後3時から4時までの授業はなしにして拙宅にほぼ全員(30名)が集まり、飾りつけや食事の準備まですべて彼ら自身で行ってくれた。始まるまで外で待機してほしいと言われていたので、助手のドミンゴ氏と共に適当に時間をつぶして指定された4時半に戻った。実はこのクラスは15日に近くのビーチに行く予定でいたが、中心核のリーダーが大事な用事が入ってしまったために、こちらは急遽中止となり、その代わりに14日に拙宅でのパーティとなった訳である。

家に入って驚いた。テープや風船などできれいに飾り付けがなされ、 学生たちがわーと現れて、Happy Birthdayの歌声と共にケーキを目の前に差し出してきた。それからが大変である。学生たちとの記念写真が始まった。その後しばらくの間、男子学生が食事の用意をし、女子学生はおしゃべりをしたり飲み物を飲んだりして寛いでいる。1時間くらいしただろうか。食事の用意が出来た。見ると、大きなバナナの葉の上にご飯を載せ、その上やその周りにおかず類が並べられていて、手で食べるのである。30人近くの学生があっという間に平らげてしまった。3時間くらいしてみんな帰って行った。

この日はもう一組のグループが来て、誕生日を祝ってくれた。1年生が帰ってすぐほっとする間も

なく４年生の上級クラスの学生たちが入れ替わりしてやって来た。彼らもケーキを持ってきてくれたが、フィリピンのケーキは甘すぎて一口でもうギブアップである。

翌日は１年生のグループが本来行くことになっていた Burugos（ブルゴス）へ有志の学生たちがぜひ一緒に行きたいというので、出掛けた。美しいCabangaoan Beach（カボンガオアン・ビーチ）で一日をのんびり、楽しく過ごした。昨日の疲れもあり、あまり動きたくはなかったので、ちょうどよい位であった。

実はもうひとつ、２年生の学生と共に16日にLa Union州のBauang（バアン）のリゾートへ行くことになっていたが、台風の接近で中止になった。その代わりに翌17日に近場のリゾートへ行くことになった。カラシャオというところにあるResortである。ここでもクラスのほとんどの学生が集まり、私の誕生日を祝ってくれた。

２年生の学生からケーキを贈られる

最後に、22日にもう一つのグループがZambales州（ザンバレス）のCandelaria（キャンデラリア）への旅行に招いてくれた。かなり遠いところなので、真夜中の３時出発で、帰宅は夜９時過ぎと言う強行軍で、かなり疲れた。しかし、ほぼ全員の参加で、日ごろあまり接する機会のない学生とも話をする機会もあり、大いに楽しかった。出かけた先は、ボトランというリゾート地の沖合にあるPotipot Island（ポティポット・アイランド）という無人島で、一周すれば歩いてでも10分も掛からずに回れる小さな島である。

２年生の学生と共に

４年生の学生と共に無人島へ

この島で半日のんびり過ごした。みんなで水泳を楽しみ、持参した食事を食べて、これが最後の旅行だとは想像も出来なかった。このクラスにはすでに結婚して子供のいる女子学生が２人いて、今回その一人が子供を連れて参加していた。授業では休むことがなく、熱心に来ていたので、結婚しているなどとは想像もしていなかった。フィリピンではかなり早く結婚する人が多いようで、「学生結婚」と言う言葉があるかどうかは知らないが、学生の中には男女共に結婚している例が多く見られる。昨年教えていた学生の中で、子供連れで授業に来ていた学生もいた。

このように私の誕生日を自宅で食事の用意をすべてして祝ってくれたクラスの諸君もいれば、リゾート地へ招いてくれて、そこで一日を過ごすような大々的なお祝いをしてくれたクラスも２組あった。この日は正に「我が最良の日」とでも表現してよさそうな一日であった。